

FLORA KANAGAWA

Mar. 1. 1994 No. 37

神奈川県植物誌調査会ニュース第37号

〒231 横浜市中区南仲通り 5-60 神奈川県立博物館内 神奈川県植物誌調査会
TEL 045-201-1111 内線7359・振替 横浜 3-10195



ツリシュスラン 丹沢山堂平にて

大森雄治: ケンポナシとケケンポナシ (クロウメモドキ科) の形態と分布 . . .	396
吉田多美枝: 川崎市生田緑地の絶滅危急植物	400
米山智恵子: 幕山にヤマジノギク	401
長谷川義人: 県西の植物[2] (承前)	402
勝山輝男: 丹沢大山自然環境調査の報告	403
神奈川県植物誌調査会会員名簿	404

ケンボナシとケケンボナシ（クロウメ
モドキ科）の形態と分布

（大森雄治）

ケンボナシとケケンボナシは、花や果実のない時期に葉の毛の有無だけにこだわると、ほとんど無毛のケケンボナシやまばらに毛のあるケンボナシがあるため、誤同定されることがままある。神奈川県内で採集された標本にも有毛のケンボナシ属があるが、長谷川義人氏（神奈川県植物誌調査会）はすべてケンボナシの多毛品と判断された（長谷川，1988）。筆者も三浦半島で採集されるケンボナシ属の同定に迷うことがあったので、県内だけでなく他地域のものも含め、これら2種の形態上の相違、分布などを明らかにする必要性を感じてきた。最近東京大学総合研究資料館の標本を検討する機会を得たので、果実と葉の形態、及び分布に関し報告する。標本閲覧の便宜をはかっていただいた大場秀章博士（東京大学総合研究資料館）に感謝したい。

1. 形態

2種を見分ける形質としてよく用いられているのは、果実表面の毛の有無と、葉の鋸歯の形態であるが、がく片や花弁の形態もよい区別点となる（Kimura, 1939）。花や果実があれば同定に迷うことはなさそうであるが、それらのない標本では、葉の毛の有無よりも、鋸歯の比較をした方が同定が確実であろう。ケンボナシの果実表面は、無毛で黒色であり（第1図A）、ケケンボナシの果実は褐色の毛で覆われている（第1図B）。また、葉の鋸歯はケンボナシでやや不揃いの鋭鋸歯があり（第2図A）、ケケンボナシでは低く鈍頭である（第2図B）。

2. 日本での分布状況

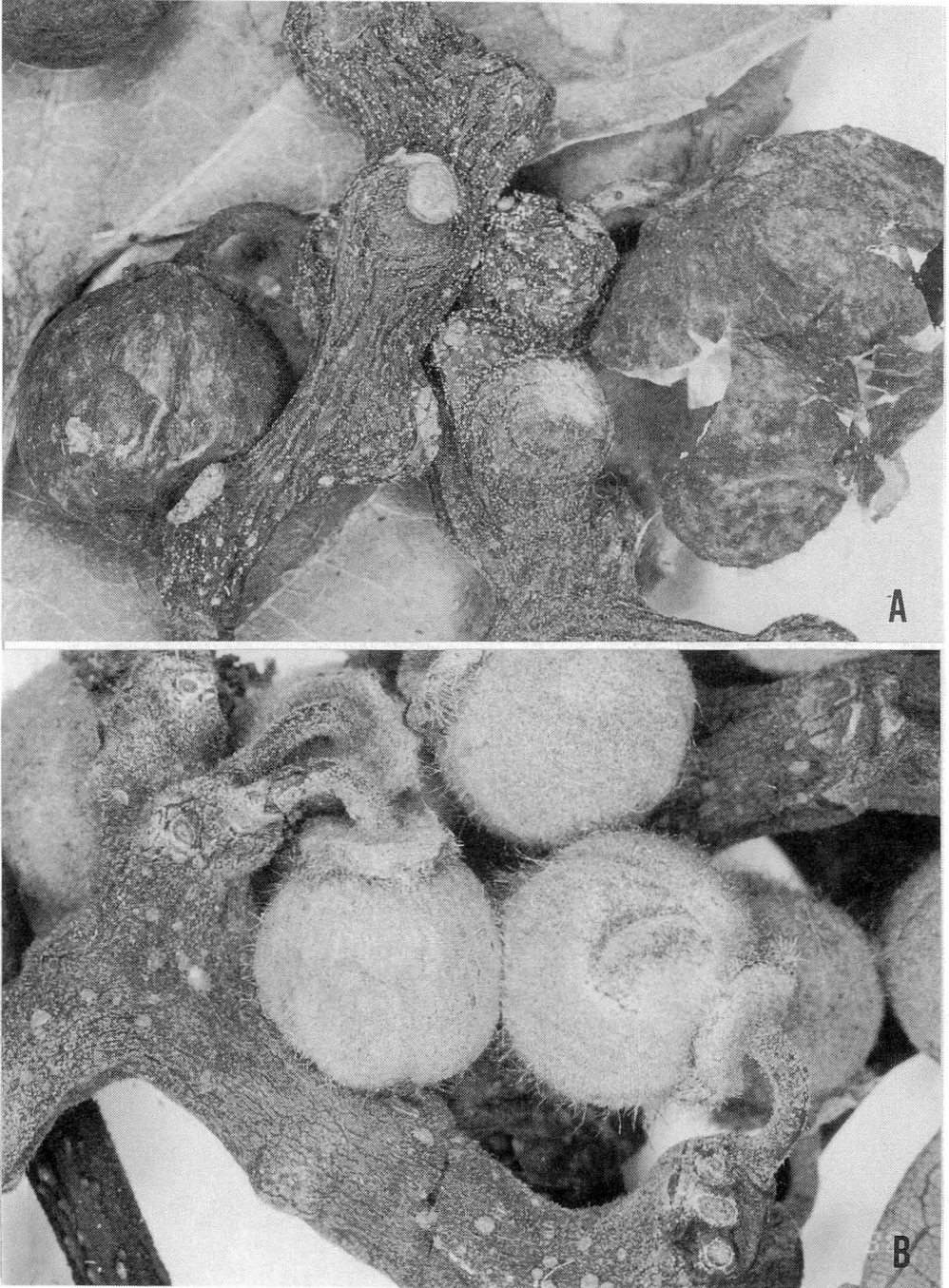
ケンボナシは、北村・村田（1971）、靱山（1989）ともに奥尻島、本州、四国、九州、朝鮮、中国を分布域とし、ただし、「山では

ケケンボナシに比べごくまれ」（北村・村田，1971）とある。ケケンボナシは、北村・村田（1971）では本州・四国、靱山（1989）では本州（西部に多い）、四国を分布域としている。大井・北川（1983）では、本州（宮城県以南）、四国、九州（宮崎県）とされている。また、倉田（1968，1973）によれば、ケンボナシで、奥尻島と本州・四国・九州、ケケンボナシで、栃木県・千葉県に各1か所と静岡・長野・岐阜・石川県以西に産地が打たれている。このように、調査や資料がまだ不足しているためか、ケンボナシ属の分布状況は十分に把握されているとは言えない。

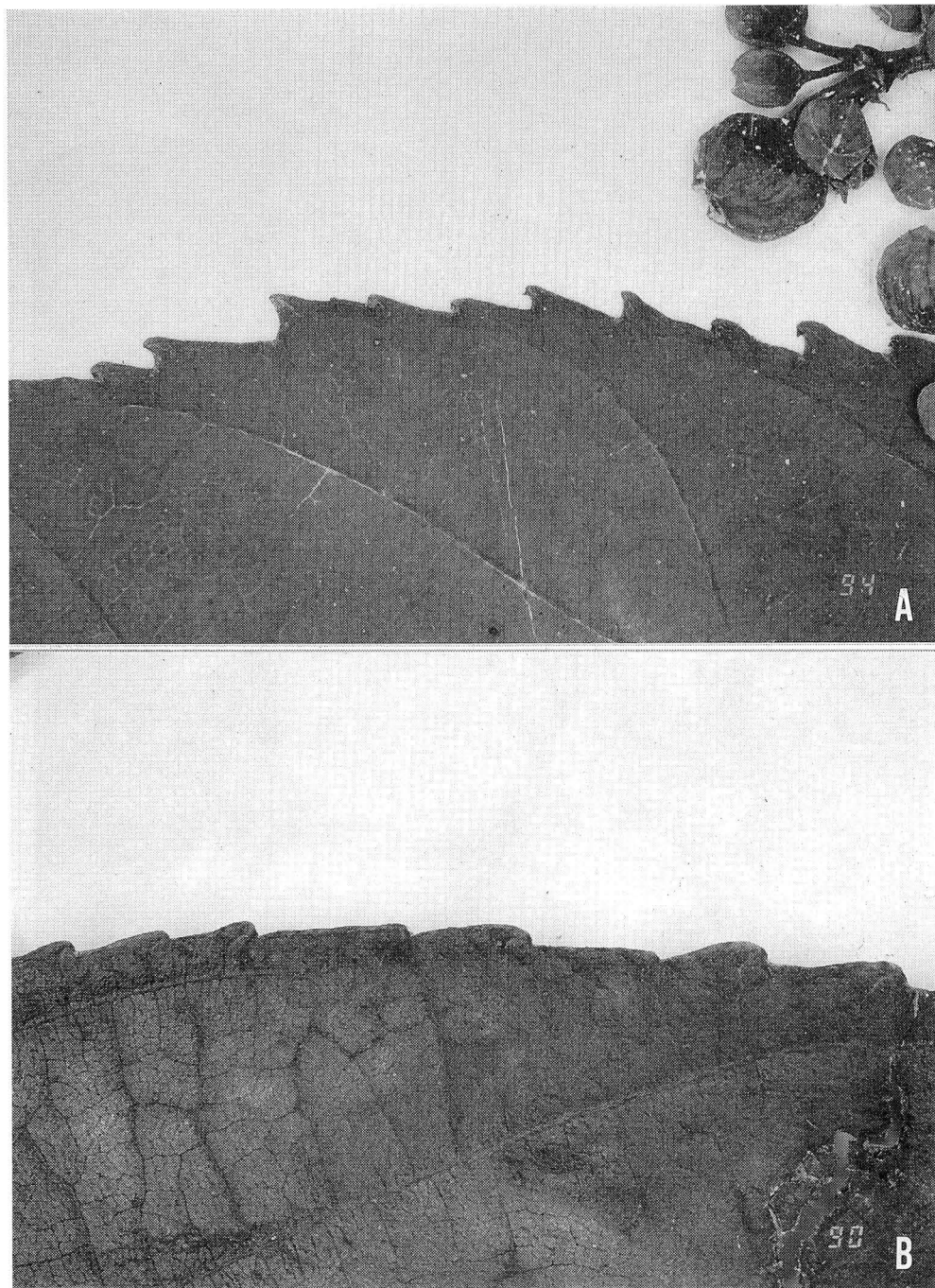
神奈川県内でも、林ほか（1961）に丹沢世附（まれ）の記録があり、相模原市教育委員会（1988）では相模原市内に分布するとされており、長谷川（1988）の見解とは異なる。

ところで、Kimura（1939）は、中井が *Hovenia dulcis* Thunb. var. *tomentella* Makino を組み替えて、*H. tomentella* (Makino) Nakai ex Kimura としたことを報告したが、そこで引用されたケケンボナシの標本は、四国と本州南部、紀伊の日高・高野山と越前敦賀であり、一方のケンボナシの標本は本州で陸前築館・東京・相模横浜・北鎌倉・信濃徳本峠・伊豆八幡野・九州の対馬であった。

東京大学総合研究資料館収蔵のケケンボナシ27点、ケンボナシ29点で調べたところ、ケケンボナシの東限は静岡県磐田郡水窪町・長野県下伊那郡泰阜（やすおか）村・木曾賤母・愛知県新城市出沢（すざわ）・滋賀県伊吹山山麓・高島郡マキノ町・敦賀市オクノ、ケンボナシの西限は金沢市尾山・富山県下新川宇奈月・長野県徳本峠・南佐久郡平賀北沢・山梨県西八代郡下部町・伊豆八幡野となり、最初にケケンボナシを認識したMakino(1914)がすでに指摘したように、両種が東西にすみわけているように推測される。しかし、検討した標本、とくに西日本の標本が少なく、倉田（1968，1973）



第1図. ケンボナシ属の果実 A: ケンボナシ (神奈川県横浜市川島, 1915年6月9日, 久内清孝, 東京大学総合研究資料館収蔵資料), B: ケケンボナシ (滋賀県高島町郡マキノ町, 1982年9月14日, 大橋広好ほか, 東京大学総合研究資料館収蔵資料)



第2図. ケンボナシ属の葉の鋸歯 A: ケンボナシ, B: ケケンボナシ.
標本データは第1図に同じ.

の分布図では静岡県と関西北部，四国九州では両種が見られるようであり，2種の分布状況はそう単純ではなさそうである。

地方植物誌によれば，たとえば杉本（1984）では，ケケンボナシは東は静岡県三島市まで分布し，同県の西半ではケンボナシより多いとされ，上野（1991）では宮城・福島・栃木に分布するとされる。

3. 分布

ケンボナシ属は東アジアの特産属の一つであり，日本からヒマラヤまで分布している。中国では3種2変種が認められており（中国科学院植物研究所主編，1983），ここでは日本のケケンボナシ *H. tomentella* は *H. trichocarpa* の異名とされている。日本のケケンボナシと，ケンボナシの変種で朝鮮半島の *H. dulcis* Thunb. var. *koreana* Nakai を独立した分類群と認めれば，4種3変種となる。

大井・北川（1983）や，阿部（1990）がケケンボナシと同種と認めた *H. trichocarpa* Chun et Tsiang (Chun, W.Y. and Tsiang, Ying 1939. A New Species of *Hovenia*. *Sunyatsenia* 4: 16-17. pl.6.f.3.) は，北緯30度以南に当たる安徽・浙江・江西・福建・湖南・広東・広西・貴州に分布し，ケンボナシ *H. dulcis* はほぼ北緯30度から40度の範囲で，西は甘粛，四川まで分布している（中国科学院植物研究所主編，1983）。また，*H. dulcis* var. *koreana* は朝鮮半島中部から南部に分布している (Tai, 1965)。ケケンボナシが中国の *H. trichocarpa* の異名であるとすれば（たとえそうでなくとも少なくとも極めて近縁であろう），日本での2種の南北の「すみわけ」が大陸でも同じように起きており，興味深い。さらに分布や生活史を調べ，検討したい。

引用文献

阿部近一 1990. 徳島県植物誌. 580ページ. 教育出版センター，徳島.

Chen Yi-ling 1982. *Flora reipublicae popularis sinicae* Tomus 48 Rhamnaceae.

中国科学院植物研究所主編 1983. 中国高等植物図鑑 補編第二冊. 879ページ.

長谷川義人 1988. クロウメモドキ科. 神奈川県植物誌1988: 908-913.

林 弥栄・小林義雄・小山芳太郎・大河原利江 1961. 丹沢山塊の植物調査報告. 林業試験場研究報告, (133): 1-128, pl. 1-16.

Kimura Y. 1939. Species and varieties of *Hovenia*. 53: 471-479, pl. 7.

北村四郎・村田 源 1971. 原色日本植物図鑑 木本編 [I]. 453ページ. 保育社.

倉田 悟 1968. 原色日本林業樹木図鑑第2巻 (社団法人日本林業技術協会編). 265ページ. 地球出版.

倉田 悟 1973. 原色日本林業樹木図鑑第4巻 (社団法人日本林業技術協会編). 223ページ. 地球社.

Makino T. 1914. Observations on the flora of Japan. *Bot. Mag. Tokyo*, 28(329): 153-190.

榎山泰一 1989. クロウメモドキ科. 佐竹ほか編 「日本の野生植物木本II」: 49-57.

大井次三郎著・北川政夫改訂 1983. 新日本植物誌顕花編. 1716ページ. 至文堂.

相模原市教育委員会編 1988. 相模原市の植生. 227ページ. 相模原市教育委員会社会教育部社会教育課.

杉本順一 1984. 静岡県植物誌. 814ページ. 第一法規出版.

Tai Hyun Chung 1965. Illustrated encyclopedia of fauna and flora of Korea, vol. 5 Tracheophyta. 1824 pp.

上野雄規編 1991. 北本州産高等植物チェックリスト. 365ページ. 東北植物研究会.

川崎市生田緑地の絶滅危急植物

(吉田多美枝)

レッドデータブック・日本の絶滅危惧植物(1992)の「我国における保護上重要な植物リスト, (同, pp. 41-141)」の中で生田緑地で自生のみられるものはトキホコリ, ミズニラ, マヤラン, エビネ, カンアオイ属などである。これらは何れも危急種にあげられたものである。危急種とは「今すぐ絶滅という危機に瀕するということはないが, 現状では確実に絶滅の方向に向かってしていると判断されるもの(同, pp. 41)」と評価されたものである。このうち近い将来に環境変化が予測されるためその生存が危ういものについて触れてみる。

1. トキホコリ

生田緑地にはトキホコリの生育地が3ヶ所ある。神奈川県植物誌(1988)の記録では分布は綾瀬のみであった(pp. 569)。1993年に生田緑地採集の標本を多摩で登録した。

「昭和初期には極めて普通の雑草であったというが今は極めて稀(植物誌, pp. 568)」とされているが, 生田緑地の個体数は可成りなものである。

生育地1: 第一の生育地は北側に開口部を持つ緩やかな傾斜の谷戸である。ここは三方を低い尾根に囲まれており, 南側が最も高く, 北側の開口部では1m程の石積みをはさんで, その先の平坦部と繋がっている。

尾根部分にはコナラ, ヤマザクラ, エゴノキが生えており谷戸の上部を覆い, その被度は95%に達している。尾根にはアズマネザサが繁茂しているが, 谷戸部では一部に見られるのみである。

谷戸は周囲の斜面から滲み出てくる水で常時湿っており, ミゾシダ, ミヤマシラスゲが多いが植物相は貧困である。これは日照の少なさと過湿な土壌によるものと考えられるが

この一見, 植物にとって劣悪な条件が幸いしたのか, この谷戸にトキホコリが多く見られる。

生育地2: 生育地1の谷戸の尾根をはさんでこの尾根の東側斜面の裾部にも生育地がある。

斜面にはコナラ, アカシデ, エゴなどの高木が生えアズマネザサが繁っている。その裾部は傾斜はゆるやかで, 植栽のトウカエデ, ツバキなどがあり, 人の手の入った場所である。しかし尾根の斜面下部から滲み出している水は部分的には生育地1より多く, 上空を覆っている樹木と南側の丘にさえぎられて日照はほとんどない。その為かここには他の草はあまりはえていない。ここで可成りの量のトキホコリが見られる。

生育地3: 菖蒲池の脇に造られた水路の縁の植え込みの周辺にも可成りの個体数が見られる。ここは東側に尾根のある谷戸であるが, 菖蒲池は広く(785m²)谷戸全体は5700m²もあり, 非常に明るい。トキホコリが生育している周辺の土壌は常に湿潤ではあるが前記2地点とは生育条件に大差がある。又この水路の完成は1991年と比較的新しい。これらを考え合わせると, ここのトキホコリは客土による移入とも考えられる。

危惧

このたび生田緑地内に画家岡本太郎氏の記念館を建設する計画が発表され, すでに環境調査が始まっている。この調査は11月~2月に行われることになっている。また調査対象地域に前記生育地も入っているものの, この時期にはすでにトキホコリは枯れている。この文章のための下調べに同地点を訪れた12月1日にはすでに見あたらなかった。したがって環境調査の植物の種の中からトキホコリは抜けてしまうと考えられる。

その上現時点での記念館建設の最も有力な候補地とされている所は, トキホコリの生育地1, 2の谷戸の上部にあたる丘の頂きであ

るため、この計画が実施されるとしみ出してくる水はなくなり、工事用の車のための道路の拡幅と整備の影響もあり土は急速に乾いてしまうと思われる。更にこの工事のための樹木の伐採により日照条件も大きく変化することであろう。この場合この2点ではトキホコリが客土による移入であれば、水路の完成以後2シーズンしか経過していないことに加えて、夏は暗く、秋に光の入るような所を好む性質から、一年中明るいここでの永続的生育は期待できないと思われる。

2. ミズニラ

生田緑地内の湿地に隣接した谷戸にミズニラが生育している。ここは個人の所有地で、以前は水田であったが数年前に休耕田となり現在は一部だけが野菜畑として耕作されている。生産緑地の看板は立っているが大部分は草地のまま放置されている。休耕田となつてからの草の繁茂は著しく、トウゴクヘラオモダカ、コウガイゼキショウ等と共にミズニラの生育している所にも水田雑草が茂りミズニラの生育を阻害している。これは田に水を入れなくなったための土壌の乾燥化によるものである。

ミズニラは「沼、池、川の底やまれに湿地にも生じ……。池沼の改修と富栄養化の影響を受けて急速に生育場所を失っている危急種である。(日本の野生植物、シダ編、pp. 66)」という程水との関係の深い植物である。

この谷戸のミズニラの生育地はたまたま、湧き水を水源とする生田緑地の湿地の最下部、水の捌け口の近くに位置しているために辛ろうじて生き続けている。しかしこの水も流量は少なく、殆どが谷戸脇の水路に落ちてしまうために生育地は年々せばまっている。

乾燥化と他の植物の繁茂の状態からみてこのままでは近い将来にこのミズニラはなくなってしまふのではないかと心配される。

幕山にヤマジノギク

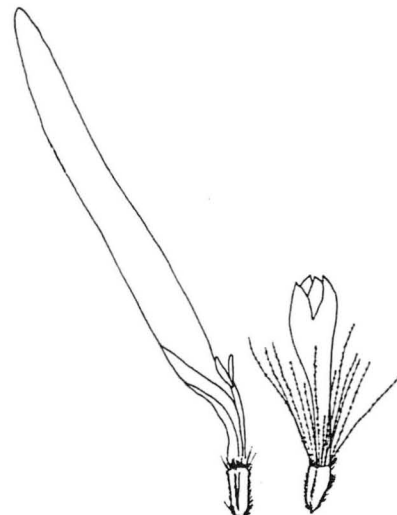
(米山智恵子)

県による湯河原の幕山(標高615m)の整備は平成5年3月より着手され、4月に終了した。西側の新登山道の整備、植栽、あずま屋の建設などがその内容であった。新登山道には礫石が分厚く敷かれ、10月3日に登ったときには、工事中に裸地になっていた場所に平地の植物がたくましく生い茂っていた。今回報告のヤマジノギクは中腹の林縁でちょうど曲り角にあたる場所に生えており、日照も比較的悪く、他の雑草も少なかった。

茎は直立し、頭花は数少なく淡紫色で直径3cm以上、葉は倒披針形で茎とともに粗毛がある。舌状花の冠毛はごく短い(図参照)。

ヤマジノギクの分布は本州中部以西、四国、九州であり、神奈川県では初登場である。静岡県植物誌によると、静岡県では西部に広く分布し、飛び離れて伊豆下田の記録がある。

ヤマジノギクとは関係はないが、今回の県事業としての植栽はその種類の選定において、自然の植生を無視している。その受注者は造園業。宜なるかな。県が予算決定前に博物館を通すという道が開かれないものだろうか。



左: 舌状花, 右: 筒状花。(佐藤恭子画)

県西の植物 [2] (承前)

(長谷川義人)

28. キバナノショウキラン JUL.4,1993(YU-2)

Yuania amagiensis Nakai et F. Maekawa

湯河原町鍛冶屋のしとどの窟下の新崎川上流かんのん沢の常緑樹林下の腐葉中の2株を見出し、12花を持つ大きい株を標本とした。合同調査で箱根金時神社で見たことがある。雨期中にひっそりと咲くので発見は偶然性の強いもので、梅雨の合間に会う種である。湯河原には記録がある。

29. キヨスミウツボ JUL.4,1993(YU-2)

Phacellanthus tubiflorus Sieb. et Zucc.

上記発見場所より30m下流の礫と腐植土の混ざった場所に3株を見出し、内1株を標本とした。大場達之氏の教示による不動尻と秦野の柏木氏による鐘ヶ嶽の産を私は知るのみである。メッシュ新産。

30. イガホウズキ SEP.19,1993(YA-8)

Physaliastrum echinatum (Yatabe) Makino

皆瀬川高杉のウラジロガシ(名木100選)の近くにある。神奈川県では相当数のメッシュに出現するが、個体数は極めて少なく、群生しない。プロットのよりはドットの産する。標本未作成。最近では山北虫沢名納沢(AUG.25,1991)、城山隧道寄り白銀林道(JUL.4,1993)、県北綱子川上流(OCT.28,1990)、他に三浦森戸川上流などで、極めて行き会うことの少ない種である。なおミズーリ植物園のアクセリウス氏により学名の誤用の指摘が発表されたので表記学名とした。(J.J.B. 68: 138)

31. クモラン SEP.19,1993(YA-8)

Taeniophyllum glandulosum Blume

稲村毅氏の案内で皆瀬川流域で稲村の発見した2個体を更に高杉部落の近くで1個体を見ることができた。かつて久内清孝先生のお話では、鎌倉今泉称名寺内と川崎多摩区樹形城跡に本種はあった、とのことである。秋山

守氏によれば洒水の滝にもあったそうである。

32. アキノギンリョウソウ

SEP.19,1993(YA-8), OCT.16,1993(MAT)

Monotropa uniflora L.

皆瀬川の高杉・人遠近くに数個体あった。また雨山峠下の寄沢側で城川四郎氏が1個体を発見した。私の知る範囲では鎌倉今泉白山神社内、横浜栄区公田町公団団地脇にあった。房総半島の一部には極めて多産する。

33. カヤラン SEP.19,1993(YA-8)

Sarcochilus japonicus (Reichenb.f.) Miq.

高杉近くに50個体以上あり、この内4個体を標本として県博に収める。同行の稲村毅・荻野哲也両君の助力があった。

34. ヤマトグサ SEP.19,1993(YA-8)

Theligonum japonicum Okubo et Makino

高杉の大ウラジロガシの下にある。標本は未作成。メッシュ新産。

35. ヤシヤビシヤク SEP.25,1993(YA-5)

Ribes ambiguum Maxim.

丹沢大山環境総合調査団植物相の調査で大又沢上流で見出された。前回蛭ヶ岳調査の際にも小崎昭則氏によって発見されている。果実期で液果は1室で小粒の種子多数。極めて粘質性の強い果液に包まれ甘味があって、多分ヤドリギと同様鳥によって種子散布が行なわれ樹上着生するのであろう。但し本種の着生はEpiphyteであり、ヤドリギはHemiparasiteである。

36. シオジ SEP.25,1993(YA-5)

Fraxinus spaethiana Lingelsheim

関東以西に分布する本種は湿性の強い深い森林内に生育するので丹沢でも限られた地域にあり数も少ない。勝山輝男氏の発見。九州の英彦山では山腹に純林を造っている。

37. ダケカンバ *Betula ermanii* Cham.

蛭ヶ岳南面(YA-3)で発見された。本県では丹沢の高所のみであり、メッシュ新産。

丹沢大山自然環境調査の報告

(調査チーム・リーダー 勝山輝男)

今年度より、県の丹沢大山自然環境調査に調査会として参加し、植物相の調査を担当している。今年度は会員22名 (FLORA KANAGAWA No.36 で報告) で調査チームを作り活動した。全体での合同調査は次の3回行なった。他は各自が個別に入山し、事務局に報告することとした。過去に記録があるが、神奈川県植物誌1988の調査の際に標本が得られなかった種類の再発見を重点課題として取り組んだ。

① 8月12～13日 世附川と玄倉川方面

15名の参加者を得て、車4台に分乗して調査を行なった。12日に世附川上流方面 (金山沢、織戸沢、大棚沢など) をまわった。金山沢の奥でスギランが採集された。また、水の木でオオウラジロノキの果実のついた良い標本が得られた。

丹沢湖で夕食を食べた後にユースンロッジまで入り宿泊した。13日には熊木沢を廻り、中央の尾根コース、東沢の廻行、白ヶ岳の3方面に別れて蛭ヶ岳へ登った。

熊木沢沿いの林道の法面にはピランジの赤い花が目だった。東沢の出合の河原にはトダイアカバナやタチキランソウが多い。蛭ヶ岳の山腹ではミヤマツチトリモチ、ツリシュスラン、アオベンケイなどが確認された。

ミヤマツチトリモチは植物誌1988では標本が得られていなかったが、今年度4ヶ所で発見されている (蛭ヶ岳、棚沢の頭、西丹沢の甲相国境尾根、厚木の鐘ヶ岳)。

ツリシュスランも植物誌1988で標本が得られていなかったが、丹念に双眼鏡でブナの樹幹を確認しながら歩いた結果、蛭ヶ岳の他に丹沢山堂平でも見つかった。

② 8月17日～18日 一の沢峠と堂平

丹沢大山自然環境調査団全体の合同調査に参加。参加者は6名。

17日は一の沢峠の学術参考林を調査。一の沢峠近くの沢沿いにはトチノキが多い。トチノキは西丹沢ではほとんど見られないが、東丹沢の沢筋には多い。トチノキの大木にはサジランがたくさん着生していた。

札掛ロッジに宿泊し、18日には堂平を調査した。堂平のブナの林相は美しいが、シカの食害により、林床のスズタケや草本がほとんどなくなってしまった。シカが好まないマルバダケブキやヤマトリカブトがやたらと目立っていた。ブナの樹幹に着生している植物を双眼鏡で探してまわった。オジャグジデングが多く見られる。ツリシュスランも数本のブナから見出された。

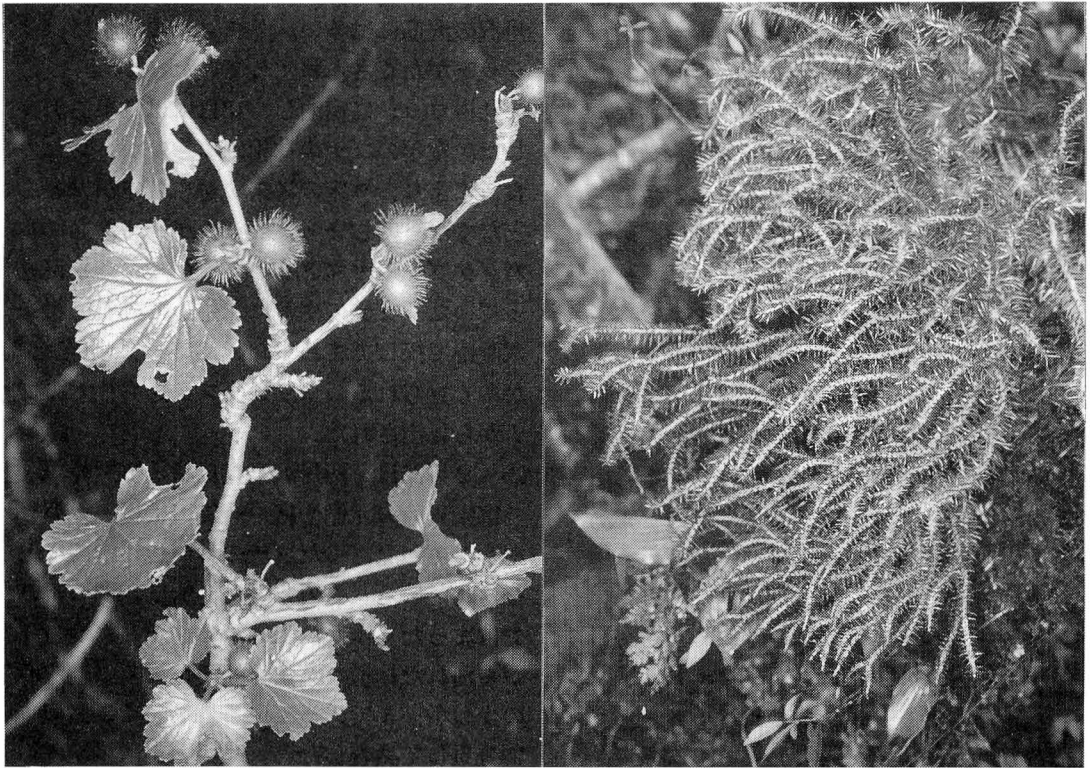
③ 9月25日 西丹沢富士見峠～織戸峠

富士見峠の北側や織戸峠周辺にはアカガシやケヤキが混ざったブナの林が良い状態で保存されている。この方面は植物誌1988の調査ではまったく歩かれていない。現在、地蔵平から別れた林道が富士見峠を越えて、織戸峠の少し手前まで入っている。7名で3台の車に分乗して調査した。

織戸峠周辺のブナ林でナツエビネが見つかった。過去に記録はあるが、植物誌1988ではみつかっていなかった。織戸峠東側の沢にアカガシの大木が倒れ、その幹に大量のセッコク、スギラン、ヤシャビシヤク、サジランが着生し、圧巻であった。

樹幹に着生しているシダやランは植物誌1988で標本が得られなかったものが多いが、この3回の合同調査を通じて、双眼鏡で丹念に大木を見てまわったところ、スギラン、オジャグジデング、サジラン、ツリシュスラン、セッコク、アオベンケイ、ヤシャビシヤクなどかなりの個体数が確認できた。しかし、いずれも大木の高い所に付着しており、採集は不可能なことが多い。織戸峠のアカガシのように大木が倒れ、その直後に採集ができたのはきわめてラッキーであった。木が倒れて時

間がたつと多くの着生植物は勢いがなくなり、
やがて枯れてしまうようだ。



アカガシの大木に着生していたヤシャビシャク（左）とスギラン（右）
西丹沢織戸峠付近にて

神奈川県植物誌調査会会員名簿

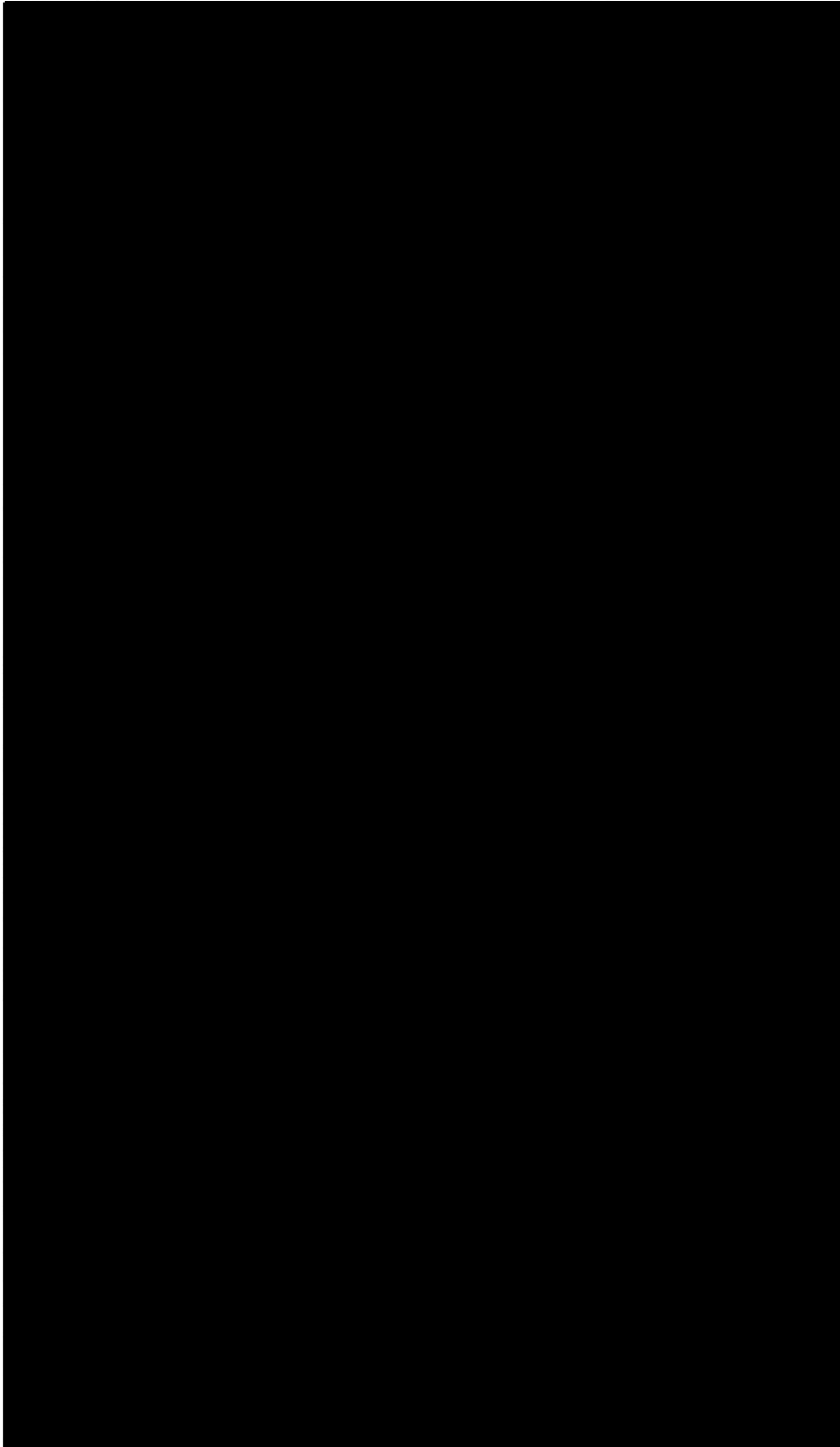
氏名	TEL	〒	住所
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]

氏名

TEL

〒

住所



氏名

TEL

〒

住所

